

作業科学：振り返りと展望

吉川ひろみ

現日本作業科学研究会会長 県立広島大学

Occupational science (作業科学) の文字を最初に見たのは 1991 年。職場の毎週の文献抄読会の準備で、*American Journal of Occupational Therapy* を読んでいたときだった。Academic discipline (学問) という言葉が、遠く澄ました感じがした。1992 年にウェスタンミシガン大学に留学して、授業の課題で Elizabeth Yerxa の論文や Ann C. Mosey の論文を読んだ。作業療法の基盤となる知識を提供する作業科学を創設する必要性を訴える立場と、作業療法は応用科学だから、多様な学問領域の知識を使うのであって作業療法独自の基礎学問など必要ないという立場があることを知った。私も最初は、作業療法の基礎研究として日本で行われていた研究(健康者の指腹に圧センサーをつけてマクラメすとか)を思い出して、作業科学に対してあまり興味がなかった。そうでなくても作業療法研究が少ないのに、実践に役立たない研究を作業療法士がするのはやめてほしいと思った。Mosey が言うように、作業療法と離れて作業科学を学問として発展させたいのなら、どうぞやってくださいという感じだった。1993 年に帰国して Florence Clark の講演録を読んだ。40 代で脳卒中になった大学教授が障害者としてではなく、文学好きの女性ペニーとして再生する物語だった。私が作業療法士になってから 10 年間身をおいていた「リハビリテーション」に対する懐疑心が煽られる内容でもあった。留学中に倫理学の授業を受けたり、Clark の論文に引用されていたロバート・マーフィが書いたボディ・サイレントの翻訳を読んだり、1995 年に赴任した現在の職場で始めた倫理研究会の活動が、私の作業科学への興味をつないでいると思う。

作業科学を知ってよかったと思うのは、現象学や言語学といったそれまで読むことがなかった本を読むようになったことだ。私が存在している世界を私がどう認識しているかを、注意深く問い直すことで、いろいろな現象をうまく理解できるようになったと思う。無意識な自分の認識、思い込みや偏見や自分が考える「普通」を、意識化すること

ができる。言語学を知っている人には当たり前のことらしいが、シニフィアン(言葉そのもの)とシニフィエ(言葉の意味)を区別することや、話し言葉(パロール)と書き言葉(エリクチュール)を区別することを知ったときは、便利なことを知ったと得をした気持ちになった。文化人類学のエティック(行為)とエミック(行為の意味)の区別も同様だ。私が作業科学と出会った初期の頃は、作業科学を入りに、いろいろな学問がもっている、世界を理解するための便利な概念を知ることができる喜びを感じていた。

その後、作業科学は作業療法とのつながりを深めていったような気がする。Clark が基礎科学と応用科学を区別するよりも、科学的知識を実際の社会に役立つようにする橋渡し科学(translational science)が重要だと主張したことも、この傾向が強まったのだと思う。日本では、最初から「作業科学をどう作業療法に生かすか」という議論が盛んだったように思う。こうした議論に対して、私は違和感をもっていった。作業療法の発展には作業療法の知識と技能を身に付ける努力をするべきだと思うからだ。

作業科学にも参加しているカナダの作業療法士である Elizabeth Townsend と Helene Polatajko は、私の作業療法の考え方や実践に大きな影響を与えている。作業を大事にする真の作業療法を追求する上で、この人たちの主張はとても役立っている。オーストラリアの Alison Wicks は、大学院で Anne Wilcock に会って、作業科学に感染してしまったと言った。公衆衛生的規模で作業の活用を考える視点は、私の活動に影響を与えた。Wicks の作業レンズを通して世界を見るという考えは、真の作業療法実践の方法を追求している Anne Fisher の心も動かしたようだ。最近、「作業中心の実践(occupation-centered practice)」と言っている。

作業科学には、大きな可能性があると思う。作業的公正(occupational justice)は、作業科学が生み出した重要な概念で、社会的公正(social justice)と共に、何が

なぜ公正だと考えられるのかについての熱い議論が続くことを期待する。学問は、権威者から与えられるものではない。自然界で突然見つかるものでもない。学問の終わりは見えないが、目指す方向に向かって進み続ける必要が

ある。作業を知ろうとする態度、作業を知るために取り組む研究が増えることで、作業科学が、今後も発展し続けることを期待したい。